



著しく個性的な概念で完成された本機は慎重且つ精巧なフルバランスを使った設計。日本生まれのライン・プリアンプはデジタルソース再生でピュアな喜びを約束してくれる。

一見、ライン・プリアンプはHi-Fi システムの中では複雑な要素を有しないコンポーネントの様に思える。当然ではあるが、ライン・プリアンプはその固有特性がサウンドに影響を与えてはならない。しかし、プリアンプの設計は標準化の概念からは程遠く、極限のピュアオーディオを目指すブティック（小規模専門会社）にとってはまだまだ改善できる領域である。

これにピッタリ当てはまるのが斬新かつ創造的な発想を得意とする比較的新しい日本の会社、オーロラサウンドである。小売価格£8000 のプリダは唐木氏の設計・開発によるものでトランス式ボリュームコントロールが採用されている。現在に至るまでピュアオーディオを熱狂的に追い求める人達を対象にしたプリアンプにのみ採用されている動作原理である。

しかし、これは唐木氏による最初のオーディオファイル向けプリアンプ設計ではない。比較的小さい歴史を持つオーロラサウンドは唐木氏のCADA (Control Amplifier for Digital Audio)から始まる。古風な直熱3極真空管と最新のDAコンバーターを融合、ひとつのシャーシーに納められた本機は業界で唯一のHi-Fi製品であった。品質のよい真空管3A5の安定した調達は困難になってきており残念ながらCADAはその生産販売が終わった。

プリダは全く違う。全て半導体で構成されており「デジタルオーディオ用プリアンプ」と称しているがDACは含まれていない。しかしこの表現はある意味論理的である。その理由はオーロラサウンドはアナログソース対応のVIDA Phono Stage アンプを提供しているからだ。VIDAと同様、プリダもモジュラー構成となっており同じパワーサプライモジュールを各チャンネルに一個ずつ採用している。新しいディスクリットアンプモジュール「Aurora-AMP」を合計6個使用しているのだ。

しかし、一番革新的なのはトランス型減衰機能である。受動型 (Passive) アンプの場合、従来型の抵抗に依るステップ減衰をトランスの2次巻き線のタップで置き換えている事で入力インピーダンスを一定に保つだけに留まらず、出力側も抵抗を使用した際に起こるローレベル時のインピーダンスの上昇を防いでくれる。例えば現在調達可能なSowter製トランスと26接点のロータリースイッチを併用する事で50dBレンジを2dB間隔で調整可能になる。

### 斬新製

アクティブプリアンプでトランス型ボリュームコントロールを採用しているのは斬新である。言うまでもなくバランス型を採用したプリダがそれだ。オーロラサウンド独自のボリュームコントロールモジュールは明らかにオートトランスと言え。一次巻き線と二次巻き線が一本の導線から成り立っている。UKのPickering社製のガラス管に密閉されたリレーは外部の磁気制御で作動させ、1dB刻みで54段階の微調整が可能だ。DCバッファアンプをボリュームコントロールモジュールの前段に置く事でトランスのインダクタンスに起因する入力ソ-

スや負荷容量の相互作用を完全に抑えている。XLR バランス入力を採用、バランス出力は最終段のオーロラ AMP モジュールへと伝達される。

プリダの前面パネルは実に簡素にまとめられている。2 個のエンドレスエンコーダーが配置されており、左のツマミはソース選択、右はボリュームコントロール。中央に納められた楕円のデジタルディスプレイがそれらの選択を表示してくれる。

通常、ディスプレイはボリュームレベルを 1dB から 54dB の間でセッティングされたレベルを表示する。ソースセクターに触れると選択された入力ソース（1-4 はアンバランス・ライン入力、5-6 はバランス入力）を数秒間表示、直ぐに元のボリュームレベルに戻る。使用中の入力ソースを確認するのにツマミに触れねばならず、継続したディスプレイよりは使い勝手は良くない。

フロントパネル上の小さな LED は Phase-Invert（逆相）表示。リモートコントロールはメタルケースに収められており、追加のフィーチャーが装備されている。十字に配列されたボタンと Up/Down 矢印でボリュームの調整、左右バランスと更にセンターボタンでミュートも可能。

上記を作動するとディスプレイ上の LED が点灯する。左右の LED が消えた点が丁度センターとなる。ソースの設定はリモートの 1-6 で選択できる。また、ディスプレイを消す事も可能である。

パワースイッチをフロントパネルの下部に取り付けたのはオーロラサウンドが最初の会社ではない。しかし、その横にゲイン・セレクト用のスイッチが設けられており、6dB の減衰ができる。ユニット下部の緑の LED が点灯、この減衰状態を確認できる。ほとんどのプリアンプはボリュームを無音状態にまで減衰させているがプリダでは最小のセッティング、つまり「1」のレベルでも音量が大きすぎる場合がある。従いゲイン・セレクトは夜間高能率のスピーカーを使った場合に有効であるがシステム構成に拠っては減衰量が不十分な場合があるかも知れない。

ユニットの背面にはバランス（XLR）とアンバランス（RCA Phono）インプットが配置されている。これは内部の独立モノ構成を物語っている。加えて、バランスとアンバランス出力ソケットが一個ずつ各チャンネルに配備されている。バランスとアンバランスは同時に出力している。

### 細部が明白に

視聴に当たって私はいつものソファに腰を下ろした。（see [www.hifinews.co.uk/news/article/meet-the-team:-steve-harris/9911](http://www.hifinews.co.uk/news/article/meet-the-team:-steve-harris/9911)）しかし、今回は通常とは異なるシステム構成を使った。Bryston4BSST, Balanced Stereo Power Amplifier は Unilet が親切にも貸してくれた製品であり、Van Damme 製のバランスケーブルを使用。アンバランスには Vertere Pulse B 相互接続を、そしてスピーカーは B&W 製 CM10s を使った。

私の評価はバランス接続の方が良いと感じたが両者とも大差の無い性能であった。The Village Vanguard Box (Columbia CK62191) の Wynton Marsalis' s Selections を聴いた時に分かるが、トランペット奏者が冗談交じりに時間を問うと聴衆の返事が僅かではあるが明瞭に聞こえる。Patricia Barber' s The Cole Porter Mix (Blue Note 50999 5 01468 2 6)にある Easy To Love の始まり部分では多少ではあるがボーカルの質感が増しましたこれも少しではあるが全ての楽器の明瞭度が上がっている。

この後私はバランスフォーマットで視聴を続けた。CD に継ぐ CD,トラックに継ぐトラックと聴き続けたが今まで気付かなかった「サウンド」の再生にこのプリアンプの性能に引き付けられ感嘆した。一例を挙げると、Clangers And Mash (NaimEdge naim CD 137)に録音されている Gwyneth Herbert の Perfect Fit (Original)で繊細な表現が聞き取れる。手拍子はより生に近く、リズムを取る指のタップ音さえも輪郭があり、リアルなのである。これらの「サウンド」は通常埋もれてしまうものである。

製品の「質」は CD に録音された繊細なサウンドを再生できる能力で評価される。June Tabor の素晴らしい演奏に依る Quercus (ECM 372 4555)の The Lads In Their Hundreds は The Anvil in Basingstoke に於いて 2006

年初頭にライブ録音された。しかし発売前にオスロの Rainbow Studio で Jan Erik Kongshaug と Mangred Eicher に依ってミックスされた。プリダで聴くと Anvil の雰囲気や状況を ECM サウンドで上手く表現しているのが見える様だ。

全く異なる 3 曲、Tori Freestone Trio と In The Chop House (Whirlwind Recordings WR4648) を聴いた時、音楽の複雑なリズム感や精巧さを生々しく再現した。Freestone の輝く和声のセンスは和楽器がまさにそこにあるということを感じさせる。プリダはサクソフォンの音を無類に美しく正しく表現してくれた。

1970 年代のロック (Archetypal) を聴くとプリダは鋭さや乱雑さでは無く、落ち着きがあり又穏やかでありながらダイナミックなサウンドを提供してくれる。Dylan の Blood On The Tracks (Columbia 512350 6) の再生では全ての楽器がウンパッパのリズムを Lily, Rosemary And The Jack Of Hearts を通して再現している。Simple Twist Of Fate ではアコースティックギターに腰があり繊細な印象やダイナミックな抑揚が伝えるべき意図を協調しているのがわかる。

### 真の透明性

プリダは近代のレコーディングでも全く揺ぎ無く泰然自若としている。Come Around Sundown (Sony 88697782412) の King Of Leon 'The End' で音量を極限まで上げた際、ドラムの響きは正に巨大で Celeb Followill のようなボーカルは頑丈であり、砕ける様なピアノの響きと共に徐々に静まる楽句では完璧なコントラストを醸し出している。

クラシック音楽でもプリダはオーケストラの重厚な量感さえも鮮明さと輝きを持って再現する。LSO の 2003 Barbican 録音版 Bernard Haitink 指揮に依る Brahms Symphony No 1 (LSO Live LS00045) ではオープニングの楽章では多くのシステムで見られる繊細さが不在ゆえに起きる消音的な不透明感があるが、PREDA は海のごとく前進する。

ハイレゾソースでは Chord Hugo 製 DAC をプリダと一緒に使った。iTUNES と Pure Music からダウンロードした MacBook に収めてあるファイルを再生。ここではソースを汚す事なく、又妥協のない真の透明感が得られた。Tim Hugh の録音に依る Hands On Heart (Naim) の Kodaly Solo Cello Sonata, では音楽の強烈さを妨げるものは一切なくチェロは素晴らしく豊かに Wigmore Hall の音響を朗々と鳴り響かせた。

Rimsky-Korsakov の Dance of the Tumbler では Minnesota オーケストラはホールの音響を實に見事に再現している。打楽器は生々しく、息遣いを感じる如くである。奏者 Ann Akiko Meyers の Bach の Violin Concerto BWV1041 では弦の繊細で優美な響き、また、JD Souther の The Sad Café では時代を超えた哀愁と惜しみ深い憂鬱さが聴く人を魅了する。真に秘めたサウンドを絶妙に伝えてくれる。

### Hi-Fi News の採決 (結論)

プリダは少なくとも一般的なプリアンプではないと言える。設計者の長年の経験、最新のエレクトロニクス技術とサウンドに対する情熱が融合して生まれた製品である。スタイルと人間工学的には少々独特であり万人向けではないかも知れない。しかし、音響的には表現力に富んでおり、ボーカルの質感は卓越しているだけでなく、音楽としてのアppeールがずば抜けている。まずは聴いてみる必要がある。

### ラボ リポート

オーロラサウンドのトランス式 54 ステップ・ボリュームコントロールは 50dB のダイナミックレンジを 1dB ステップで調整が可能。加えて、プリダの Standard と Low のゲイン選択がその範囲を更に広げている。操作パネルの下部にある緑色のボタンを操作、バランスモードで実験をした結果、スタンダードでは最大 +13.4dB (ゲイン幅は -36.5dB から +13.4dB)、Low では -0.5dB (レンジは -52.1dB から -0.5dB) であった。プリダのインプットとアウトプットの過負荷許容度は充分な余裕がある。バランス XLR、ソースインピーダンス 4Ω に於いて、10Vrms (インプット) と 25Vrms (アウトプット) もある。従い、如何なるラインレベルインプットソースでもこのヘッドルーム (無歪限界能力) を持ってすれば大概のパワーアンプを駆動することができる。

特筆すべきは、本機のトランス式ボリュームコントロールは精密なバッファ回路を有する点だ。プリダの入力と出力インピーダンスは周波数とフェーズに関わり無く一定に保たれる点だ。(Graph 1)前者は緩やかに -0.38dB/20kHz の上昇がありプレゼンスの強調を暗示している。(0.03dB/1kHz-10kHz)歪は500Hz 以上から 20kHz では極端に小さく 0.0008%である。トランスは低域で THD を多少押し上げている。0.01%/100Hz, 0.1%/20Hz から 1.9%/5Hz (Graph 2 を参照)これは LF レスポンスに順じている。(Graph 1)ノイズもまた競合のプリアンプと比べると Low-level で 50Hz の高調波が中域から高域に掛けて存在する。然しながら、A-wtd S/N で 95dB(re. 0dBV)は充分な許容範囲と言える。(105dB+は最高レベル) 読者にはオーロラサウンド プリダの解りやすい QC-Suite Test Report を読まれる事をお勧めする。[www.hifinews.co.uk](http://www.hifinews.co.uk)へリンク、赤色の download ボタンをクリックする事でアクセスができる。PM

## 上昇するオーロラ

大阪生まれの唐木氏は現在横浜に在住している。高校と大学ではロックバンドでギターを弾いていた。15歳の時既に RIAA Phono Equaliser を作成。1980年、Texas Instrument Japan に入社、やがて Digital Audio Group のビジネスデレクターとなった。2009年、TI Japan から早期退職、自分の好きなオーディオの道に邁進した。最初はパワーアンプの製作、DAC や Switching ボックスなどをオーディオ専門店などに下ろした。2011年、オーロラサウンド独自の CADA が誕生、真空管式プリアンプに DAC を内蔵した製品。更に、オーロラサウンドの HiFace Pro D/D コンバーターは M2Tech の HiFace をチューンアップしたものである。2012年、氏は BusPower-Pro を市場に出した。これは USB デバイス用に開発したクリーンパワーサプライである。同年、Phono Stage アンプ VIDA を世に送り出した。2013年、オーロラサウンド(株)を設立、工房と視聴室を持ち、妻と2名の契約エンジニアとビジネスを運営している。

(Right) 写真説明

完全なモノの双子(二重)構成となっているのが判る。プリダはトランス式ボリュームコントロールを54段階リレーで切替えている。入力と出力はバッファアンプで相互の影響を避けている。

(Above)

2個のロータリーコントロールはソースの選択とボリュームコントロールを司っている。パワースイッチと High/Low ゲインはユニットの下部に隠されている。ディスプレイはセッティングとゲインを表示。

以上